防研セミナー

時代を読み解く

シリーズ⑱

変容する中
「抵

イラク戦争後の中東政治の20年

イラク戦争から20年が経ち、中東政治の景色は大きく変わった。イラクの没落に加え、2011年のいわゆる「アラブの春」を経て、エジプトやシリアといった地域大国も内政課題への対応を余儀なくされた。

こうした中で台頭したのがイランやサウジアラビア、アラブ首長国連邦（UAE）などの湾岸諸国である。イランは後者2国やその同盟国である米国と中東地域において地政学的競争を進めてきた一方、サウジアラビアやUAEはイスラエルとの距離を縮めることで、イランへの対抗を模索してきた。

影響力を増す「抵抗の枢軸」

中東情勢が変化する中、近年、中東で影響力を増してきたのが「抵抗の枢軸」と呼ばれるネットワークである。アメリカン・エンタープライズ研究所のキャサリン・ツィンマーマンは、「抵抗の枢軸」を「アラブ諸国における米国のパートナーやイスラエルの存在を含め、中東における西側の影響に反対する、イラン主導の国家・非国家主体の非公式な集団」と定義する。

イランはイスラエルや米国などの敵国に対して、イラン国外で戦う前方防衛戦略を追求してきた背景があり、「抵抗の枢軸」は前方防衛を実現するための重要な手段といえる。

「抵抗の枢軸」にどの組織が含まれるかは論者によって見解が異なるものの、イラン、「ヒズブッラー（ヒズボラ）」、シリアは最低限の共通項といえる。「抵抗の枢軸」寄りのメディア『ハナーディク』では、これらに加えてイエメンの武装組織「フーシー派」、パレスチナの武装組織「ハマース」など計12のアクターがメンバーとして扱われている。

「抵抗の枢軸」のメンバーは、反西側諸国という点で一致している一方、性質的には雑多である。イランやヒズブッラーなどをシーア派組織と括ることができる一方、アサド政権はアラブ民族主義、ハマースはスンナ派イスラーム主義に思想的基盤を持つ。

また、後述するフーシー派はザイド派というシーア派の中でも少数派の復興運動に起源を持ち、イランなどを中心とするシーア派の最大宗派「12イマーム派」とは思想的に異なる。すなわち、反西側諸国という中東では広範な訴求力を有する言説を前面に掲げることで、「抵抗の枢軸」はネットワークの開放性を担保していると考えられる。

今月の講師

吉田（よしだ）　智聡（ともあき）氏

防衛研究所　理論研究部

社会・経済研究室研究員

1996（平成８）年生まれ、奈良県出身。大阪大学外国語学部外国語学科アラビア語専攻卒、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程（５年一貫制）退学。修士（地域研究）。大和総研経済調査部研究員を経て、2021年、防衛研究所入所。専門は中東地域研究（湾岸諸国およびイエメンの国際関係・安全保障）。論文に「イエメン・フーシー派の海上戦力とその発展―国家性の追求手段としての海上戦力―」（『海幹校戦略研究』第13巻第１号、23年６月収録）など。

東政治と抵抗の枢軸」

フーシー派事例に見る「協力関係」

反西側を掲げる「抵抗の枢軸」は実利によって結びついており、フーシー派の事例は示唆に富んでいる。

２０１５年からイエメンに自派の政権を樹立させたフーシー派は、同年の内戦勃発以前からヒズブッラーやイランの支援を受けていたと見られている。13年頃には、フーシー派はイラン革命防衛隊やヒズブッラーの支援の下、シリアで戦闘経験を積んでいると報道された。

内戦以降、その紐帯は強まり、イランはミサイルやドローンの部品などを供与してきた。フーシー派は非国家主体であるにもかかわらず、これらを用いて継戦し、国内前線では膠着状態を生じさせつつ、サウジアラビアやＵＡＥへの越境攻撃すら行ってきた。両国はアフガニスタンにおける米国のように、想定以上の軍事・政治・経済的資源をイエメンに投入せざるを得ない状況に陥った。

イエメン内戦はイランとイスラエルの対立にも影響を与えている。イスラエルはイエメン対岸のエリトリアに海軍基地を有し、対イランのインテリジェンス活動に従事している。そのため、イランにとってイエメンは紅海・アデン湾海域方面の対イスラエル拠点とみなすこともできる。

また、フーシー派が保有するドローン（イランの「シャヘド１３６」とみられる）はイスラエルを射程に収めており、同派はイスラエル攻撃を示唆するプロパガンダを展開してきた。

このように、フーシー派はイランなどから支援を受けることで強靱性を高める一方、イランは同派をイエメンにおける「代理勢力」とすることで前方防衛を追求してきた。

このような「垂直的な関係」に加えて、「抵抗の枢軸」の注目すべき点は代理勢力間の「水平的な関係」にある。

ヒズブッラーもイラン同様に内戦以前からフーシー派を支援し、ヒズブッラーの要員はイエメンに展開しているとされる。シリアはフーシー派側の大使を受け入れており、イエメン政府を継承したという立場を取る同派にとって貴重な公式の外交ルートとなってきた。以上のように、代理勢力間の協力によって「抵抗の枢軸」は強靱性を向上させてきた。

中東地域の政治 これからの20年

今年3月のイランとサウジアラビアの国交正常化合意や、5月のシリアのアラブ連盟復帰のように、現在、「アラブの春」以後に形成された中東地域の国際関係は急速に変容している。

この流れで「抵抗の枢軸」の組織間の関係も変化し得るが、反西側諸国という主張と実利によって結びつくこのネットワークを根底から覆すことは、領袖たるイランの体制崩壊を例外として容易ではない。

中東政治は過去20年で景色を大きく変えたが、反西側諸国という考えは、かたちを変えて遥か以前から脈々と受け継がれてきた。

次の20年においてもこの考えを基盤とする政治運動や西側諸国との対立はなくならないであろうし、エネルギー輸入や在外邦人などの観点からも、我が国は当事者であり続ける。

当事者として中東の課題に取り組む上で、「抵抗の枢軸」の「垂直的関係」と「水平的関係」のように、中東地域の国境を越えたネクサス（繋がり）を捉える眼界が肝要となろう。

テーマをさらに深掘り
「防研セミナーブリーフィング」

執筆者の吉田研究員が今回のテーマをさらに深掘りして解説し、防衛省職員と突っ込んだ議論を行う「防研セミナーブリーフィング」が７月21日（金）午後３時～４時まで、市ヶ谷のＦ１棟６階「国際会議場」で開かれます。参加者・聴講者は隊員に限定します。ご興味ある方は奮ってご参加ください。▽問い合わせ＝防研企画調整課03―3268―3111（内線29177）まで。